

アイヌ語千歳方言における自称詞と対称詞について

佐藤 知己

はじめに

アイヌ語諸方言の中、千歳方言は現在でも流暢な話し手の残る数少ない方言の一つである。にもかかわらず、この方言に関する報告は多くはなく、近年では中川(一九八八)⁽¹⁾による人称代名詞に関する研究が発表されたのに留まる。筆者もこの方言の研究に着手し、基本的な語彙や文法の調査に従事してきたが、調査を進める中、アイヌ語の記述には、従来の人称指示(人称代名詞及び人称接辞)の概念を拡張することが必要で、そのためには、対称詞、自称詞という概念を取り入れる必要があるのではないかと考えるようになった。ここで用いた自称詞、対称詞という用語は、鈴木(一九七三)が日本語の分析において積極的に取り入れたものである。自称詞は話し手が自分自身に言及することばの総称、対称詞は話し相手に言及

することばの総称と定義される(従って、人称代名詞はそれらの一部にすぎない)。さらに、対称詞には呼掛けに用いられる呼格的用法と、文の主語や目的語として用いられる代名詞的用法の二種が区別される(鈴木一九七三、一四六―一四九)。鈴木(一九七三)は、いわゆるヨーロッパ諸言語におけるような人称代名詞を持たないといわれる日本語が、その一方で話し手や聞き手に言及するための極めて複雑かつ整然たる手段を有することを、自称詞、対称詞という枠組みを用いることによって巧みに明らかにしている。

アイヌ語は、日本語と異なり、人称代名詞を有し、名詞や動詞などに人称による語形変化を有する言語である。従って、従来のアイヌ語の研究においては、このような人称指示体系の側面にはかり研究者の注意が向けられ、日本語の自称詞や対称詞と類似した現象があることについては、ほとんど関心が持たれなかったと言って良い

のではないかと思われる。

しかしながら、このことはアイヌ語の全体的な性格をとらえる上で、必ずしも好ましいことではないと筆者は考える。以下では従来のアイヌ語研究では、あまり取り上げられてこなかった側面に重点をおいて、アイヌ語における自称詞と対称詞の諸相をみていくことにしたい。

今回の報告では、次の方にインフォーマントになっていただいた。複雑煩瑣な質問に、時にはユーモアも交えられながら、最後まで懇切な御教示をいただいた。ここに記して篤く感謝申し上げます。

白沢なべ氏。女性。一九〇五年（戸籍上は一九〇六年）、千歳市蘭越（ランコシ）生まれ。現在も蘭越に在住。父、小山田 Saare-kie 氏⁽²⁾、母、Annatan（通称。本名は Usutukri、旧姓ちふね）氏。両親共千歳の人。

1 年齢・性別名称と対称詞

⁽³⁾この方言における年齢・性別による人間の名称は概略表1の通りである。

これらはすべて、第三者を指して用いられるばかりでなく、聞き手を指示する呼格的対称詞、すなわち呼びかけのことばとしての用法も持っている⁽⁴⁾。しかし、主として呼ぶ側の年齢層と、呼ばれる側の年齢層との上下関係によって呼格的用法は制約されており、この

年齢	男	女
0 - 1 歳	teynesi	
1 - 2 歳	sontak	
10歳前後	hekaci	matkaci
15歳 - 20歳前後	okkaypo	pon katkemat, menokopo
30代 - 50代	acapo, okkayo	katkemat, unarpe, menoko
60代 - 80代	ekasi	huci
90代 - 100代	onne ekasi	onne huci

表 1

制約を破ると、奇妙な表現になるのみならず、場合によっては呼びかけの相手に対して失礼にあたることもある。

ここでは、名前を知らず、血のつながりもない他人を、呼んで起こす、という状況を想定して、各年齢層相互の呼び方を調査してみた。その結果をまとめると、表2のようになる。これによれば、例えば話し手が hekaci 位の男の子、聞き手が teynesi 位の赤ん坊であれば、相手に teynesi 二と呼びかけることができる⁽⁵⁾ことがわかる。

また、アイヌ語では、命令表現に大きく分けて二つあり、動詞の単数形を用いる場合と、複数形を用いる場合とがある。複数形を用いた命令は、終助詞 *tu* を伴う。複数形を用いるのは、命令の相手が複数である場合であるが、これはまた、丁寧な命令として用いられることも多い。未確定の部分も多いが、表2には参考までに、

話し手→聞き手	呼格的対称詞	動詞命令形
hekaci → teynesi hekaci → sontak hekaci → hekaci hekaci → matkaci hekaci → okkaypo hekaci → pon katkemat hekaci → acapo hekaci → katkemat hekaci → ekasi hekaci → huci hekaci → onne ekasi hekaci → onne huci	teynesi sontak なし なし ku-yupo ku-sapo acapo unarpe ekasi huci ekasi huci	hopuni hopuni hopuni hopuni hopunpa yan, hopuni hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan, hopuni hopunpa yan, hopuni hopunpa yan hopunpa yan
matkaci → teynesi matkaci → sontak matkaci → hekaci matkaci → matkaci matkaci → okkaypo matkaci → pon katkemat matkaci → acapo matkaci → katkemat matkaci → ekasi matkaci → huci matkaci → onne ekasi matkaci → onne huci	teynesi sontak なし なし ku-yupo ku-sapo acapo unarpe ekasi huci ekasi huci	hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni, hopunpa yan hopunpa yan hopuni
okkaypo → teynesi okkaypo → sontak okkaypo → hekaci okkaypo → matkaci okkaypo → okkaypo okkaypo → pon katkemat okkaypo → acapo okkaypo → unarpe okkaypo → ekasi okkaypo → huci okkaypo → onne ekasi okkaypo → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci なし なし acapo unarpe ekasi huci ekasi huci	hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopunpa yan hopunpa yan hopuni hopunpa yan ? hopunpa yan
pon katkemat → teynesi pon katkemat → sontak pon katkemat → hekaci pon katkemat → matkaci pon katkemat → okkaypo pon katkemat → pon katkemat pon katkemat → acapo pon katkemat → katkemat pon katkemat → ekasi pon katkemat → huci pon katkemat → onne ekasi pon katkemat → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci なし なし acapo unarpe ekasi huci ekasi huci	hopuni hopuni hopuni hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni
acapo → teynesi acapo → sontak acapo → hekaci acapo → matkaci acapo → okkaypo acapo → pon katkemat acapo → acapo acapo → katkemat acapo → ekasi acapo → huci acapo → onne ekasi acapo → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci okkaypo pon katkemat, menokopo acapo なし ekasi huci, unarpe, ku-sapo ekasi huci	hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopunpa yan hopunpa yan hopuni

話し手→聞き手	呼格的対称詞	動詞命令形
katkemat → teynesi katkemat → sontak katkemat → hekaci katkemat → matkaci katkemat → okkaypo katkemat → pon katkemat katkemat → acapo katkemat → katkemat katkemat → ekasi katkemat → huci katkemat → onne ekasi katkemat → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci okkaypo menokopo acapo なし ekasi huci ekasi huci	hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopunpa yan hopunpa yan hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopuni
ekasi → teynesi ekasi → sontak ekasi → hekaci ekasi → matkaci ekasi → okkaypo ekasi → pon katkemat ekasi → acapo ekasi → katkemat ekasi → ekasi ekasi → huci ekasi → onne ekasi ekasi → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci okkaypo pon katkemat, menokopo, menoko okkayo menoko なし rupne mat, menoko ekasi huci	hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni ? ? hopunpa yan hopuni hopunpa yan hopunpa yan
huci → teynesi huci → sontak huci → hekaci huci → matkaci huci → okkaypo huci → pon katkemat huci → acapo huci → katkemat huci → ekasi huci → huci huci → onne ekasi huci → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci okkaypo pon katkemat, menokopo ? katkemat ekasi huci ekasi ?	hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan ? hopunpa yan ? ?
onne ekasi → teynesi onne ekasi → sontak onne ekasi → hekaci onne ekasi → matkaci onne ekasi → okkaypo onne ekasi → pon katkemat onne ekasi → acapo onne ekasi → katkemat onne ekasi → ekasi onne ekasi → huci onne ekasi → onne ekasi onne ekasi → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci okkaypo pon katkemat acapo, nispa katkemat, menoko ? huci, menoko なし huci, menoko	hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni hopuni ? ? ? ?
onne huci → teynesi onne huci → sontak onne huci → hekaci onne huci → matkaci onne huci → okkaypo onne huci → pon katkemat onne huci → acapo onne huci → katkemat onne huci → ekasi onne huci → huci onne huci → onne ekasi onne huci → onne huci	teynesi sontak hekaci matkaci okkaypo pon katkemat, menokopo acapo katkemat ekasi huci ekasi huci	hopuni hopuni hopuni hopuni ? hopuni hopuni hopunpa yan hopuni hopunpa yan ?

表 2

相手を起こす際、単数形の命令 *hopuni* 「起きろ」を用いるか、複数形の命令 *hopunpa yari* 「起きなせうい」を用いるかも併せて示した。

なお、「なし」とした箇所は、適当な対称詞がなく、場合によって様々であることを示す（例えば、同年輩でも、相手が少しでも年上であれば、*ku-yupo* 「兄さん」、*ku-sapo* 「姉さん」と呼ぶことが多いようである）。また、「？」は未調査か、適当な回答が得られなかったことを示す。

答えにゆれがあったり、不明の箇所もあって、未完成な表ではあるが、ここでは比較的確かと思われる二点を指摘したい。

まず第一に、同年輩の人を呼ぶ呼称に乏しいことがあげられる。

これは日本語でも同様であるが、アイヌ語では特に若い世代同士 (*okkaypo, pon katkemat* まつ) で、この傾向が認められるようである。

第二に命令形の使用に関し、若い女性 (*matkaci, pon katkemat*) は同年輩以上の男性に対して丁寧な命令を用いるのに対し、女性に対してはあまり用いないようである。もともと現実の場面の観察による調査結果ではないので、あまり断定的なことは述べられないが、物語テキストの分析などを併用することによって、今後この欠陥を補いたいと考えている。

2 親族名称と対称詞、自称詞

この方言における主な親族名称は表3の通りである。

これらの親族名称は、多くの場合、やはり呼格的対称詞として用いることができるが、そこには相互の年齢層によるある種の制限がみられる。すなわち、自己より年齢が上であれば、親族名称をそのまま呼格的対称詞に用いることができるが、自己より年齢が下の場合には親族名称を呼格的に用いることはできない。目下への呼掛けは親族名称とは別な手段（例えば、名前「ただし日本名」を呼ぶ）によってなされる。この点に関しては日本語の場合と事情がよく似ていると言える。

ところで、兄や姉を意味する語は、父母や祖父母などを意味する語と同じく、呼格的用法を有するが、形態上から見ると、基準となる「自己」よりも目下の親族（弟、妹、娘、息子）を意味する語と同じ構造を持っている点が目される。すなわち、「私の」を意味する人称接辞 *pa-*（母音の前で *pa-*）を含んでいる。単なる偶然である可能性もあるが、あるいはこれは、年齢の上下ばかりでなく、世代の上下という区別がアイヌ社会において重視されていたことを示唆するものかもしれない。つまり、兄や姉は、年齢的には確かに目上だが、世代的には自己と同一であり、より身近な存在であるといえる。そのような意識の違いが、形態上の区別として、言語面にあ

夫	妻
ku-hoku(hu)	ku-maci(hi)
ku-kor kur	ku-kor menoko
en-or un kur	ku-kor katkemat
	en-or un katemat

表 4

普通である。
 (2) ku- honi arka wa.
 1SG POSS 腹 痛い よ
 「私の腹が痛いよ。」

さて、日本語の場合には、親族名称の用法は、概略的に言って、自己を境として目上と目下を分ける一本の線で表示できる。すなわち、この線より上の親族には親族名称を対称詞として用い、この線より下の親族には相手から見た親族名称を自称詞として用いる（鈴木一九七三、一五〇）。しかし、アイヌ語の場合には、このような一本の線では不足で、二本の線が必要となることがわかる。すなわち、目上への対称詞用法は日本語と同じく自己と目上を分ける線 A で表示できるが、目下への自称詞用法は自己と自己より下の世代を分けるもう一本の線 B で表示されるとみられる（表 3 参照）⁽¹²⁾。

3 夫婦間の対称詞について

2 ではふれなかったが、親族のうち、夫婦間の呼称には色々問題がある。まず、「夫」、「妻」を意味する名称には表 4 のようなものがある⁽¹³⁾。これら相互間の意味上の差異については明瞭な報告は得られなかったが、いずれも、直接、妻や夫に対して対称詞的に用い

ることはなく、第三者に話す際に自分の夫や妻に言及する形式のようである。例えば、夫が妻に向かって、ku-macini-to-ka, ku-kor menko-i などと呼びかけることはない。これは日本語とも共通するでは、お互いをどのように呼ぶのか、夫から妻へと、妻から夫への場合に分けて、以下にみることにする（なお、以下では自称詞、対称詞に人称代名詞と共に人称接辞を含めて用いる）。

(1) 妻に対する対称詞

日本語では、夫が妻を呼ぶ特定の対称詞がなく、場合によって様々であると言って良いと思われるが（宮島他一九八二、四〇六）、アイヌ語ではどうであろうか。

結論的に言って、アイヌ語は日本語に比べても、妻を呼ぶ手段に乏しい言語であると言える。

まず、日本語と異なり、子供中心の対称詞はアイヌ語では普通用いられないので、夫が妻を toto 「母さん」などと呼ぶことはない。また、日本語では妻の名前を呼ぶことも多いが、アイヌ語では夫が妻の名前を呼ぶことも普通はない⁽¹⁴⁾。従って、多くの場合、妻に対しては直接用件を言って相手と呼ぶしか方法がないことになる⁽¹⁵⁾。

(2) 夫に対する対称詞

普通、夫に対して妻が名前で呼びかけることはない⁽¹⁶⁾。これは一種

	代名詞	他動詞主格 (所属格)	自動詞主格	対格
2 人称単数	eani	e-	e-	e-
2 人称複数	ecioka (y)	eci-	eci-	eci-
2 人称敬称	asinuma	a-	-an	
2 人称敬称	aoka (y) ^①	a-	-an	

表 5

のタブーに近いものである(知里一九五四、五二一)。また、表 4 にあげた形式を呼掛けを含め、対称詞として用いることはない。例えば、夫に *ku-hoku!* とか、*ku-kor kuri!* とか呼びかけることはない。その代わり、敬意を含むいくつかの対称詞がこの目的のために用いられる。以下では、それらの主な場合について述べる。

① 敬称人称代名詞と敬称人称接辞

アイヌ語には、通常の二人称の他に、敬意を表する相手に対する人称表示(ここでは敬称人称と呼ぶ)がある。この人称表示は妻が夫に話しかける時に典型的に用いられるが、他の場合もここで併せて扱うことにする。参考までに、敬称人称を含めて、二人称に用いられる代名詞、接辞を表 5 に示す。

この表について補足すれば、まず、表には敬称人称代名詞に *asinuma*, *aokay* の二つが上がついているが、いずれも敬称代名詞として用いられることは確かであるけれども、両者の違いは今のところ

ろあまり明確ではない⁽¹⁸⁾。また、敬称人称対格の接辞が空白になっているが、この点については後に触れる別の形式がその機能を担っていると考えられる。

まず、*aokay* は、既に述べたように妻が夫に対して用いることができる。

(3) *aokay* *ipe* *-an* *a ruwe?*

2HON PRO 食べら 2HON NOM INTR たの

「あなた食べたの。」

これは、妻が自分の夫に対して丁寧聞く言い方である。ちなみに、夫が妻に対して聞く場合には、以下のように通常の二人称表示 ϕ を用いる。

(4) *e-ipe* *a?*

2SG 食べら た

「おまえ食べたか。」

(5) *e-ipe* *a ruwe?*

2SG 食べら たの

「おまえ食べたの。」

なお、男は普通(4)のような言葉を使うが、丁寧に言う言い方としては(5)のように言うという。また、次のような例もある。これも妻が夫に言う場合である。

(6) aokay cepkoyki-an wa poronno cep

ZHON PRO 魚取る ZHON NOM INTR て たくさん 魚

a-koyki wa, cip oro esik sekor kane

ZHON NOM TR て 舟 中 一杯だと

ukoytak -an hawe ku- nu

話し合う INDEF⁽²¹⁾ NOM INTR 話 1SG NOM 聞く

a wa.

たよ

「あなたが魚取りに行ってたくさん取って、舟に一杯だと人が言い合うのを（私は）聞いた。」

次の例は、夫でなく、兄に対して aokay を用いた例である。白沢氏の母が自分の兄に対してこう言ったのを聞いたことがあるという。

(7) 兄: humna eun ene haw as -i e- nu hi an ?

誰 に こう 言う こと 2SG 聞く ことある

「誰のことをおまえ言っているのか。」

妹: aokay um.

ZHON PRO よ

「あなたのことですよ。」

また、以下のように、aokay のような代名詞を伴わずに、敬称人称接辞だけが用いられることもある。これは、aokay が夫に対

する対称詞にはは限られていると思われるのに比べると、より広い相手に対する用法を有するようでもある。

(8) a- tekkotoro popus yak

ZHON NOM TR 掌 ツメできると

a- ye a wa pirka ruwe?

INDEF NOM TR 言うたが 良い の

「あなたの掌にツメができています。それだけと良くなったの。」

これは、自分の夫の掌にツメができたときに、そばにいて「寧ろ聞くことはになると言う。目下の者へは以下のように通常の二人称接辞を用いる。」

(9) e- tekkotoro popus yak a- ye

2SG 掌 ツメできると INDEF NOM TR 言う

a wa, totek a ruwe?

たが 治る た の

「おまえの掌にツメができたそうだが、治ったの。」

また、次の(10)のように娘が父親に対して敬称を用いることもある。(20)

(10) hapo, ipe -an a ruwe?

父 食べる ZHON NOM INTR た の

「お父さん、お食事なされたの。」

夫以外の人に敬称人称を用いる例が他にもある。白沢氏によると、

母が、遊びに来て泊まっていた母の兄（当時、既に曾孫もいるような老人）に向かつて（11）のようになんか聞いた覚えがあるように。

(11) ekasi hosippa-an kus ne
おじいさん 帰る 2HON NOM INTR つもり である

yakun, tan cep a- se wa sap

なら この 魚 2HON NOM TR 背負う て 下がる

-an waa- e ciki

2HON NOM INTR て 2HON NOM TR 食べる なら

somo pirka ?

ない 良い

「おじいさん、帰るなら、この魚背負って行って食べたらいかがですか。」

(12)は、おばあさんが、よそのおじいさんが畑仕事をしているのを見て、手伝ってあげる、と言った時、どうするか、という質問に対する答えである。これに対して、例えば若い奥さんに対しては、(13)のように通常の二人称表示を用いて、敬称人稱表示を用いない。

(12) ekasi isonkasi-an siri ne

おじいさん 忙しい 2HON NOM INTR の である

yakun, ku- i- kasuy yakka pirka

なら 1SG NOM INDEF ACC 手伝う ても 良い

ya ?

か

「おじいさん、忙しいなら手伝ってもいいですか。」

(13) e- isonkasi siri ne yakun eci- kasuy
2SG 忙しい の である ならば 1SG/2SG 手伝う

rusuy.

たい

「おまね忙しいなら手伝った。」

もし、おじいさんに対して、(13)のような表現を用いると、何か自分の妹か、目下の人に対してものを言っているようで、おかしいという。

以下の(14)は、男の人が敬称人稱を用いる例。これは、誰か見知らぬ男がお客様に来た時、家の ekasi (おじいさん) が問いかける言い方であるという。

(14) hunak wa arki-an ruwe an ?

どこ から 来る 2HON NOM INTR の ある

「あなたどこから来たのですか。」

(15)は、ekasi (おじいさん) が、道で知合いの huci (おばあさん) に久しぶりに出会った時にあいさつで言う言葉。おじいさんの方がこの場合、年上の感じであるという（これは、敬称人稱表示や、親族名称 huci の代名詞的対称詞用法でなく、通常の二人称表示

eci. が用いられていることによるものと思われる。これに対し、同じ場面で、おばあさんはおじいちゃんに対し、(16)のように敬称人稱表示を用いること⁽²³⁾。

(15) huci, ohonno eci-⁽²⁴⁾ nukar ka somokino,

おばあさん 長い間 ISG/2SG 見る も しないで

eci- nonkar ka somokino e- iwanke

ISG/2SG 見舞う も しないで 2SG 元気である

wa e- an ruwe?

て 2SG いる の

「おばあさん、長い間会わず、見舞いもしなかったけど、元気がいいの。」

(19) iwanke -an wa oka

元気である 2HON NOM INTR て いる

-an a ruwe?

2HON NOM INTR た の

「お元気でいらっしゃいましたの。」

敬称人稱指示の代名詞や接辞については、まだまだ不明の点が少ない。なお検討が必要である。これらの用法は、現実の場面と密接に結び付いているので、仮想的な調査方法では機能が把握しにくい面があるためと思われる。

②直示的名詞句 tankur を対称詞として用いた敬意表現

ここで用いた直示的名詞句という用語は、主に「この」を意味する近称の連体詞 taan と、付属語的な名詞 kur 「男、方」が統合して形成された tankur という名詞句を指す。⁽²⁵⁾直示的には、「この人、この方」を意味する三人称の名詞句であるが、聞き手を指して用いることができ、通常の二人称表示を用いた表現よりも敬意を表す丁寧な言い方である。典型的には主に妻が自分の夫に言及する際に用いるようである。以下に若干の例をあげる。

(17) taan kur tanto hukaba orun arpa he ki?

この方 今日 ふ化場 へ 行くかする

「あなた今日(サケ・マス)ふ化場へ行くの。」

(18) tanto hukaba orun e- arpa he ki?

今日 ふ化場 へ 2SG 行くかする

「おまえ今日ふ化場へ行くの。」

白沢氏によれば、自分の母が父に向かって、(17)のように尋ねたのを聞いたが、その時、子供心に、(18)の e- arpa he ki とらち(17)のように聞くのが目上に向かって言う言葉なのだ、と思ったそうである。なお、(17)は男にしか用いられず、女には(18)のような言い方を用いる。また、次の(19)は tankur を呼格的に用いた例である。

(19) taan kur, tanto hukaba orun paye- an

この方 今日 ふ化場 へ 行く 2HON NOM INTR

ruwe?

0

「あなた、今日ふ化場へいらっしやるの。」

また、以下の(20)も(21)も、妻が夫に対して、敬意をもって丁寧
に尋ねる表現である。どちらを用いても良いという。

(20) taan kur ka itura ruwe?

この方 も 一緒に行くの

「あなたも一緒に行くの。」

(21) itura -an ruwe?

一緒に行く 2HON NOM INTR の

「あなたも一緒に行くの。」

以下の(22)は夫に言う敬意を含んだ丁寧な言い方。これに対し、
通常の二人称表示を用いた(23)は、子供に対して使うような言葉だ
と云う。

(22) tan ikor taan kur ku- kore na.

この宝物 この方 ISG NOM あげる よ

「この宝物を私はあなたにあげるよ。」

(23) tan ikor eci- kore na.

この宝物 ISG/2SG あげる よ

「この宝物を私はおまえにあげるよ。」

既に触れたように、敬称人稱表示は対格人稱接辞を欠いているが、

直示的名詞句 taankur はちょうど、その空白部分を一部埋める機
能を担っているのではないかと考えられる。ただし、taankur を
対称詞として自分の夫以外の男性に用いることができるかどうかは
まだ明らかになっておらず、⁽²⁶⁾問題を残している。

まとめ

本稿では、主に以下の三つの点を指摘した。

A 話し手や聞き手に言及する形式に関して言えば、アイヌ語は、
いわゆるヨーロッパの諸言語で知られているような人稱指示
体系（人稱代名詞及び人稱接辞）と、日本語にみられるよう
な自称詞、対称詞の体系（年齢別名称、親族名称、直示的名
詞句）を合わせ持つ、混合型の言語である。

B 親族同士の呼称に関して言えば、アイヌ語は日本語と異なり、
目上と目下を分ける一本の線では体系をうまく説明できず、
自己と自己より下の世代を分ける、もう一本の線を必要とす
る。

C アイヌ語では妻が夫に言及する際、通常、敬称の形式が用い
られるが、ここではAで述べたアイヌ語の混合性が現れ、人
稱指示形式（人稱代名詞及び人稱接辞）と、それ以外の対称
詞（直示的名詞句）が、ある程度機能を分担し合いながら混
用される。

注

- (1) 中川(一九八八、二四九)には、それまでに知られている千歳方言に関する主な資料の一覧がある。その後出版されたものとしては、北海道教育委員会編『平成元年度アイヌ民俗文化財調査報告書』、及び『平成二年度アイヌ民俗文化財調査報告書』(札幌:同教育委員会、一九九〇、一九九一)などがある。
- (2) 「明治四年人別帳」(『千歳市史』、八八五)には、「ヘサ村、サシレキテ十七歳」とある。
- (3) 後述の親族名称と同じものが混在していて、年齢による名称と区別し難い面もあるが、ここでは得られたものをすべてあげた。
- (4) ただし、*onne ekasi*, *onne huci* は、*onne* 「年取った」という言葉が入っているので、相手に面と向かって使うことはないという。
- (5) 基本的な構造に関して、それほど大きな差異がアイヌ語各方言間にあるわけではないとおもわれるが、一応以下では、「アイヌ語」という表現を用いる場合、「少なくともアイヌ語のこの方言のこの話者に関する限り」という前提があることを了とされたい。
- (6) 調査方法としては、老人、子供などの人形を用いて、どう言うか尋ねる、という方法をとった。
- (7) *hapo*, *totto* の他、*ona* 「父」、*unu* 「母」という語もある。
- (8) これは兄からみた妹。姉は妹のことを *ku-mataki* という別の語で言及する。

(9) 少なくとも *hapo*, *totto*, *acapo*, *unarppe*, *ekasi*, *huci* は代名詞的対称詞としても用いることが出来る。

(10) たとえば、次の例を参照。

totto honihi arkanisapka na.

母 腹 急に痛む よ

hokure kusuri uk wa en- kure yan.

さあ 薬 取る て ISG ACC のおせる なさい

「お母さん急におなか痛くなったよ。早く薬を取ってきて飲ませておくれ。」

(11) ここでは、鈴木(一九七三)に従い、「妻」を除いて考えている。

(12) この他、親族名称と自称詞に関わる現象としては、やはり鈴木(一九七三、一六六)が指摘した「親族名称の子供中心の使い方」の問題がある。鈴木は、日本語では妻が夫を子供の立場から呼んで、「パパ遅いわね、どうしたのかしら。」などと言うことができるという事実に着目して、日本語の特色に関する興味深い考察を行っているが、アイヌ語ではどうかであるか、問題となるところである。この点に関しても、例が少なく、はっきりしたことが言える段階ではないが、次のような例は「子供中心の用法」の例と言えるようである。

hapo hohihi arkanisapka na. hokure kusuri uk wa ek.

父 腹 急に痛む よ さあ 薬 取る て 来る

「(母親が子供に)お父さんの腹が急に痛みでしたよ。さあ薬を取っておいで。」

もっとも、この一例しかなく、「妻が夫を *hapo* (お父さん) と呼

ぶことはない。私の母が父のことを *happo* (お父さん) といっているのを聞いたことはない。」という、この例に反するような話者の報告もあるのです、この問題については、今のところまだなんとも言えないというのが実状である。あるいは、この例には日本語の影響を考慮する必要があるかもしれない。

(13) 他の方言(例えば静岡内方言・織田ステノ氏による)にある *ku-kor nispa* という言い方はないとのこと。もともと、誰かお客がきつて *nispa hunakun arpa?* 「旦那がいついた。」と聞かれたのを受けて、奥さんが *teun nispa anak ekimne kusu arpa*. 「こちらの旦那(家の旦那)は獮に行つた。」と答えることはあるが、自分の夫を *nispa* 「旦那、金持ち」ということは普通はないという。なお、あるおじいさんが、自分の息子の自慢をする時、息子の名前 (*Koranus* という名) を呼ばずに、*ku-kon nispa* とばかり言つていた、という報告もある。

(14) 千歳の町へ米を買いに行つて、帰りに酒を飲んだ父が、大声で *ku-kor Annatan* 「私のアンマタン」と母の名前を叫びながら帰ってきたら、近所の家の人達がおかしがった。だから、いたずら半分でしか奥さんの名を呼ばないのではないか、とも白沢氏は述べられた。

(15) もともと、あまり聞いたことはないが、*makiri kor wa ek, katkemat* 「小刀を持って来て、奥さん。」と妻に言っているのを聞いたことはある、とのこと。

(16) 呼びかける場合、母が遠くの父を、「アーイー!」(「おーい」ではない)と呼んだのは聞いた。すると、父は *hemanta ta?* 「なんだっ」と言ひ、母は *tane ipe usi an na*. 「(おん)飯ですよ。」と言

つた(白沢氏による)。なお、呼びかける場合、あまり遠くでなければ、*aokay* 「あなた」とも呼べるという。

(17) *aokay* と *aoka* の違いについては、*aokay* の方が「まて(日本語北海道方言 = 丁寧)な言葉だ、」とのこと。

(18) *asinuma* の用法については中川(一九八八、二四一)も保留している。なお、(7) のような場合、自分の夫や兄には *aokay* を用い、よその旦那には *asinuma* を用いる、という報告(白沢氏による)もあるが、自分の夫、よその旦那に、*aokay, asinuma* いずれを用いても良いと言う報告もあり、一定しない。

なお、断片的ながら、調査時に得られた情報を記すと、娘が父親に *aokay un* ということはない。その場合は *hapo un* という。また、母親は女だから、*aokay un* は使えない。*totto un* というだろう、とのこと。もともと、おかあさんに通常の二人称代名詞を用いて *eani un* という、失礼な感じになるといふ。

(19) この場合、「一般に人が」というほどの意味をあらわす。敬称人稱と同形であるが、ここでは一応別のものとして扱った。

(20) この例は、四十歳くらいの成人した娘だったら、という質問に對して得られたもの。

(21) これは日本語からの借用語。固有のアイヌ語では *monasap* と *tau*、とのこと。

(22) この *tau* は、例えば沙流方言で報告されている二人称敬称対格接辞(田村一九七二、二八)とは別の、不定の対象を表す派生接辞であると考えられる。なぜならば、白沢氏は、*ku-i-nuka* 「私が貴方様を見る」、*ku-i-kore* 「私が貴方様へあげる」のような形はないと報告されているからである。もともと、目的語が敬うべき

対象である場合に派生接辞 *-i-* の付いた動詞を用いる例には、もう一つ、以下の例が得られた。

ku- kor itak pirka sekor a- ramu yakun
 ISG の 言葉 いい と ZHON NOM TR 思う ならば
 k- e- i- pakasnu kusu ne. wa.
 ISG APPL INDEF 教える つもりだ よ

「私の言葉が正しいと思うならば(あなたに)教えてあげましょう。」

(23) なお、hekaci (少年) 'okkaypo (青年) が ekasi (若くは) に向かって、敬称人稱表示を用いて *totek-an wa oka-an a ruwe?* 「元気でいましたか。」というのは、大人びた「*ruwe?*」感じがする。これは ekasi' acapo くらいの子の年配の人が ekasi に向かって言うような言葉だ、とのこと。むしろ ekasi, *totek wa an a ruwe?* と対称詞を用いた言い方がよい。しかし、*e-totekno e-an ruwe?* と、通常の二人称表示を用いた言い方は ekasi を馬鹿にしたような言い方になるといふ。

また、huci (おばあさん) に対して、huci, *ipe-an a ruwe?* '敬称人稱表示を用いた言い方ができるか、については、huci, *ipe a ruwe?* または、huci *e-ipe a?* と聞くのが普通、とのこと。ipe-an a ruwe? は、acapo (四十一-五十歳の男)、または ekasi (おじさん) に使う言葉であるといふ。

(24) これは二人称複数の *eci-* とは別の形式である。この *eci-* はこれ一つで「私がおまえを」を表す接辞であるが、これ以上分析することはできない。なお、この形式は相手が自分と同等か、目下の場合に用いられるようである。

(25) 話し手に近いものを示す連体詞に *taan* と *tan* の二つがあるが、どちらも同意味で用いられるといふ(白沢氏による)。しかし、*tan* は同じ所、*taan* はすぐ近く、という意味的区別を有する方言も報告されているので(田村一九八八、八七)、さらに違いを調査する必要があるかもしれない。なお、話し手のすぐ両隣に夫と、よその旦那さんがいる場合、ということでは、「この人(よその旦那)から私に与えられた宝物をあなた(夫)にあげる」という意味の、次のような例が得られた。

tan kur orowa a- en- kore ikor
 この人 から INDEF NOM TR ISG ACC くれる 宝物
 tanpe ne wa kusu, tan ikor tan kur ku-
 これ である て から この宝物 この人 ISG NOM
 kore rusuy.

あげる たい

「この方から私がもらった宝物はこれだから、この宝物をあなた(=夫)にあげたい。」

(26) *taankur* が夫に対する対称詞でなく、よその旦那さんを指す三人称の名詞句として用いられている例もある(*taankur hunak wa ek kur an?* 「この人何処からきた人ですか」)。しかし、*taankur* が自分の夫以外の男に対する対称詞として用いられた例は、今のところ見いだすことができない。また、白沢氏も、*taankur* は自分の旦那に言うみたいなので、例えば、ekasi 「祖父」に向かっては使えない、とも述べられた。

略号表

1SG	一人称単数	NOM	主格	TR	他動詞	PRO	代名詞
2SG	二人称単数	ACC	対格	INTR	自動詞		
1SG/2SG	一人称単数主格・ 二人称単数対格	POSS	所有格	APPL	目的語付加接辞		
2HON	二人称敬称	*	不適合な形式				
INDEF	不定人称	?	適合性に疑問のある形式				

参考文献

Chao, Y. R. 1956. Chinese Terms of Address. *Language*, 32, 1, 217-241.

- 知里真志保 一九三六 『アイヌ語法概説』 東京：岩波書店（『知里真志保著作集』第4巻。東京：平凡社。一九七四所収）
- 知里真志保 一九五四 「分類アイヌ語辞典 第三巻 人間篇」 『日本常民文化研究所彙報』68 東京：日本常民文化研究所（『知里真志保著作集』別巻II。東京：平凡社。一九七五所収）
- 服部四郎（篇） 一九六四 『アイヌ語方言辞典』 東京：岩波書店。
- 服部四郎 一九五七 「アイヌ語における年長者層特殊語」 『民族学研究』第21巻3号 東京：日本民族学会。
- 金田一京助 一九五二 「上代動詞敬語法考」 『古典の新研究』 東京：國學院大學（ただし、『金田一京助選集』III 東京：三省堂。一九六二所収）
- 金田一京助 一九六〇 『アイヌ語学講義』 『金田一京助選集』 I 東京：三省堂 一―二四四。
- 国立国語研究所 一九七一 『待遇表現』 東京：大蔵省印刷局。

宮島達夫他 一九八二 『図説日本語』 東京：角川書店。

中川裕 一九八八 「アイヌ語千歳方言の人称代名詞とその歴史的位置」 『東京大学言語学論集』88 東京：東京大学文学部言語学研究室 二二九―二五三。

鈴木孝夫 一九七三 『ことばと文化』 東京：岩波書店。

Tamura, S. 1970. Personal Affixes in the Saru Dialect of Ainu.

Jakobson, R. and Kawamoto, S. (ed.) *Studies in General and Oriental Linguistics*. Tokyo: TEC Company, Ltd. 577-611.

田村すず子 一九七一 「アイヌ語沙流方言の人称代名詞」 『言語研究』第59号 東京：日本言語学会 一一―一四。

田村すず子 一九七二 「アイヌ語沙流方言の人称の種類」 『言語研究』第61号 東京：日本言語学会 一七―三八。

田村すず子 一九八八 「アイヌ語」 亀井孝他編 『言語学大辞典』 上 東京：三省堂 六一―九四。